



# 本町だより

横浜市立本町小学校 令和4年 8月29日 発行 第597号

## 「ふれあい本町」 夏から秋へ

校長 田川 斉史

手のひらをそっとあてて、何かに「ふれる」。互いにそれを行うことで「ふれあい」が生まれる。赤ちゃんの手のひらを合わせたとき、気持ちや心の「ふれあい」ができたと感じたことがありました。本町小学校の子どもたちにも、そんな「ふれあい」をたくさん味わってほしいと願っています。生活をしていくうえで、ただ「ふれあう」だけではない場面がたくさんあります。手のひらを合わせるだけの「ふれあい」から、「こすり合い」へ。こすれることで熱が生まれ、寒い冬には手をこすり合わせて暖をとります。「ふれあい」から、「握り合い」へ。相手の手を握り、幼い子どもの手を握り、そして握り返され「握り合う」という信頼の行為が見られます。

今、社会に寛容さが失われていると言われますが、そんな時こそ、子どもの一番近くにいる存在として、「ふれあい」を原点にすることを大切にしたい、「たたくより、たたえよう」という言葉を聞いてそう思いました。



## 夏のはじめの「ラジオ体操」♪

もう65年以上前から愛されてきた、お馴染みの「ラジオ体操の歌(三代目)」。なんとも前向きで美しい歌詞、思わず口ずさみます。作詞は藤浦 光さん、作曲は藤山 一郎さんです。

今夏も、本町小学校、横浜吉田中学校、馬車道など、各自治会で早朝からラジオ体操で元気に一日をスタートさせていました。



## 「言の葉」子どもに伝える

話し言葉、書き言葉、ていねいな言葉、誠意のある言葉、言葉にはいろいろな装いがあります。現代では、SNSなどの普及で、言葉の「重要性」が大きくなってきています。かつて「言葉」を「言の葉」と読むことがありました。「葉」のように風に舞い、水に流れ、光を浴び、雨を受け、そして土となる、「言の葉」にもそんな姿が重なります。

「言の葉」は、西暦900年ごろに編纂された「古今和歌集」の序文において、「やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける」と記されており、和歌が心から生まれるものであることを、植物の葉が種から生まれることになぞらえたことから言われるようになったと考えられています。なお、「万葉集」の語源は諸説あり、どれが正しいのかはわかりません。「万葉集」は前述の「古今和歌集」より150年ほど前に編纂されたものであり、上記のなぞらえとは関係がありません。もともと「ことば」という語は「こと(事)+は(端)」から来たと考えられており、「葉」と直接のつながりはないようです。

「言の葉」、わたしの口から出る「言葉」も同じように、影響力があるものだと感じました。

今生きていること、平和であること、大切にしたいこと…は一番近いことを大切にすることもできませんね。

## 「大人の姿」子どもに伝える

大人の「背中」だけでなく、「すべて」を子どもたちは、見て、感じて、身に付けている…、そう思うことが多くあります。音楽通りの一方通行を逆走する自転車、横断歩道で止まってくれない自動車、スマホに夢中になって歩く…。

